寺田竜太:第7回有用藻類の分類に関する国際研究会に参加して

第7回有用藻類の分類に関する国際研究会(7th International Workshop on Taxonomy of Economic Seaweeds)は1997年5月12日から16日までの5日間,国際的保養地として有名なタイのプーケット島にあるプーケット海洋生物研究センター(Phuket Marine Biological Center, 通称プーケット水族館)で行われた。

この時期のプーケットはモンスーン到来の季節にさしかかるころだが,今年は雨期が遅れており雨は時折降る程度だった。そのため晴天の日など日中37-8℃に達し,また湿度が非常に高いため,エアコンを欠かせない非常に蒸し暑い日々だった。また赤道に近いため5月は日中太陽がほぼ真上に位置し,自分の影がほとんどなくなるのが北海道に住む私には印象的だった。

今回のワークショップは *Sargassum*, *Gelidium*, *Halymenia*, *Gracilaria*の分科会で構成され,全体の参加者は25名だった。Carifornia Sea Grant Programの J. Sullivan先生とConvenerのI. Abbott先生(University of Hawaii)の他に遠方からはA. Millar先生(オーストラリア, Royal Botanic Garden), B. Stantelices先生(チリ, Universidad Católica de Chile), D. Rodoriguez先生(Universidad auton. Mexico)が出席された。アジア諸国からはC. K. Tseng先生, Xia Bangmei先生, Lu Baoren先生(いずれも中国科学院海洋研究所), Put O. Ang, Jr.先生(Chinese University of Hong Kong), Phang Siew-Moi先生(University of Malaysia), Nguyen Hun Dinh先生とNang Hyunh Quang先生(National Center for Scientific Research of Vietnam)が出席された。開催国であるタイからはChair of ArrangementsであるK. Lewmanomont先生, A. Chirapart先生, C. Spanvanid先生(いずれもKasetsart University), S. Intasuwan先生夫妻(Thaksin University), R. Ruangchuay先生(Prince of Songkla University)の計6名の方々が出席された。日本関係者は,吉田忠生先生(北海道大学),大野正夫先生(高知大学),川口栄男先生(九州大学),野呂忠秀先生(鹿児島大学),鯵坂哲朗先生(京都大学),Grung Grevo Soleman氏(高知大学),そして私の計7名だった。

日本人グループ間の交流はホテル(コンドミニアム)の部屋が相部屋だったこともあり,非常に密で有益だった。また先生方はいずれも海外慣れした方ばかりで,国際的な研究会に初参加の私にとってはワークショップ以外の場(部屋での休息や食事など)で様々なお話を伺うことが出来たのも非常に貴重な経験であった。

ワークショップは,初日(12日)午前9時より開会式

ワークショップ参加者による記念撮影,5月13日プロンテップ岬にて

がおこなわれ，Abbott先生やLewmanomont先生他による挨拶とセンターの紹介後，参加者が一名ずつ紹介された。その後は各分科会に別れ，それぞれのスケジュールに従って最終日(16日)まで熱のこもった討論が続いた。私の所属する*Gracilaria*グループでは，大野先生による司会の下，まずChirapart先生からタイの*Gracilaria*に関して紹介があり，次に参加者の自己紹介と持参した標本の説明の後，それらの標本の同定や幾つかの話題に関して討論するといった形式で進行した。*Sargassum*グループでは，吉田先生，野呂先生，鯵坂先生を中心に進行し，初日は各自の標本の紹介が行われ，その後はタイやマレーシアのリスト等，テーマを絞って熱のこもった討論が行われた。*Halymenia*グループでは，川口先生が中心になり，分類に用いることのできる形質の検索を目的に標本の観察が行われた。*Gelidium*グループではB. Stantelices先生を中心に進められた。研究会の前半はそれぞれの分科会での討論が中心だったが，後半になると多少時間的余裕が生まれ，他の分科会の様子を覗いたり，個別に熱心な討論が行われていた。私も下手な英語だったが*Gracilaria*グループの先生方だけでなく他のグループの先生方と討論することができた。

特に*Gracilaria*の分類に関する有名な論文を多く執筆されているAbbott先生やXia Bangmei先生に直接お話を伺えたことは貴重であり良い思い出となった。

研究会は，プーケット海洋生物研究センターの2階の会議室でおこなわれた。タイは湿度が非常に高く各自が持参した標本の状態が心配されたが，会場は冷房が完備されて快適であり，また生物顕微鏡や実体顕微鏡が十数台用意され，加えてビデオモニターや写真撮影装置なども設置されており，観察機器も比較的充実した状態だった(欲を言えば標本を撮影する複写台があればより充実したと思う)。

また片隅には飲料水やコーヒー・紅茶の他，常にタイの代表的な茶菓子(中には海藻を使ったものもあった)が用意されていた。

昼食はセンター一階のテラスで美しいアンダマン海を眺めながらタイ料理の日替わりバイキングだった。これがまた大変スパイシーな辛さで食欲を増進しとても美味しかった。また，初日の夜にはReception dinnerが浜辺で海に沈む夕日を眺めながら催されたが，その際の料理もムードもとてもすばらしかった。2日目(13日)はワークショップ終了後，夕方から参加者全員が参加してバスで簡単な観光をした。夕食は各自でということだったので，日本人グループはPa Tong Beachにある屋台で食事をした。前日と変わってワイルドで，いかにもアジア的な雰囲気でここもまたよかった。ここで私は生まれて初めて果物の王様と呼ばれるドリアンを食べたのだが，その悪名高い臭いには参ってしまった(味は美味しいのだが)。但し，果物の女王と呼ばれるマンゴスチンはさっぱりとした上品な味で大変美味しくいただいた。また希望者は，Lewmanomont先生のはからいでタイ独特のダンスショーを見ることができ，非常によい社会勉強ができた。

3日目(14日)は漁業パトロール船(400t程度)を借り切ってクルーズ＆採集会がおこなわれた。近くの島まで船で行き，ダイビングで海藻採集を試みたが，残念ながらオゴノリ類を採集することは出来なかった。しかし天候も良く，船上での昼食(タイ料理のバイキングで今日はカニ食べ放題!)もすばらしくのんびりしたクルーズを楽しんだ。

後半の二日(15・16日)は再び熱のこもった討論が行われ，最終日には今回のワークショップの成果についての報告会があった。ここで報告された内容は後日論文としてTaxonomy of Economic Seaweeds vol.VIIに投稿することが義務づけられている。またこの夜は，Farewell dinnerが市内のホテルでなごやかな雰囲気で開かれた。多くの先生方から大会が成功裏に幕を下ろすことについて感謝の意を表すスピーチがあり，私もそれを聞きながら料理に箸を(スプーンを)運んでいたのだが，突然スピーチを指名された。冷や汗をかきながらなんとか無難に終えたのだが，今度はカラオケを歌えとの指名がきてしまった。マッテマシタとその場で思いついた坂本九の「スキヤキ」を歌ったのだが，がらになく緊張して日本語の歌詞が全くでたらめになってしまった。野呂先生に助けていただいてその場を乗り切ったのだが，日本の先生方には冷や汗をかかせてしまったようで，思い出しては私も冷や汗をかいている次第である。

以上取り留めもなく書いてしまったが，ワークショップが特にトラブルもなく，終始なごやかに，楽しく，そして真剣におこなわれたことを感じていただければ幸いである。このような充実した環境の下で研究会が行われたことに関してSullivan先生とAbbott先生に感謝すると共にLewmanomont先生やChirapart先生ら大会運営事務局の方々の細やかな配慮に感謝する次第である。

(北海道大学水産学部 〒041北海道函館市港町3丁目1-1)